九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

藤田弘毅著『消えた子ども社会の再生を ： 国分アンビシャス広場12年の軌跡』

山下, 智也
西日本短期大学

https://doi.org/10.15017/1485121

出版情報：生活体験学習研究. 14, pp.47-48, 2014-01-25. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第14号　47－48（2014）

『消えた子ども社会の再生を
── 国分アンビシャス広場12年の軌跡 ── 』

著　者：藤田弘毅
発行所：海鳥社

「子どもたちが集まる場を設ければ、大人は何もしないほうがいい」。あとがきに記された著者の言葉に、本書のタイトル『消えた子ども社会の再生を』との齟齬を感じる読者はいないだろうか。少なくとも私はそこに違和感を覚えた。

なぜ違和感を覚えたのか。それは、本書を手に取ったとき、私が勝手に、そのタイトルの主語を「大人」として読んだからであろう。消えた子ども社会の再生のために“大人は”何ができるのか、“大人が”子ども社会をどのように再生するのか、その“マニュアル”が描かれているのだと思っていた。だからこそ、「大人は何もしないほうがいい」という、いわば放任にも聞こえる言葉に、一瞬面喰ってしまう。

しかし、本書を読了した今、この言葉が身に染みるように了解されてくる。『消えた子ども社会の再生を』行う主語は、「大人」ではなく「子ども」であることに気づかされるのである。

もちろん、大人が本当に何もしていないわけではない。子どもが自ら子ども社会を再生していくための土台を築く試行錯誤が、本書には赤裸々に、かつ説得力のあるかたちで描かれている。その試行錯誤の軌跡こそが、何事にも代えがたい財産であり、子どもの遊びに携わる我々が学ぶべきお手本なのである。

さて、本書は以下の構成からなる。

まず、冒頭の「青少年問題とは何か ── 解決に向けての議論」では、筆者がなぜ「子ども社会」の問題に関わるようになったかが記されている。「（家庭・学校・地域での青少年対象の体験活動など）これだけの取り組みをしているのに、なぜ青少年に多くの問題があるのか不思議」と、現存する子ども実践の核心を突く問題提起が新鮮で心地よい。そのような背景の中、著者は2000年にアンビシャス運動百人委員会を発足し、アンビシャス運動を県民運動にしていく。

次章「子ども社会づくりに挑戦・失敗」では、著者が実際に自らの住む地域に身を置き、「国分アンビシャス広場」という遊びの場・社会を創り出すプロセスが描かれていた。そしてその過程での「失敗」が赤裸々に語られているところに、読者にとっての（当然著者らにとっても）貴重な学びがある。特に、「当初の目的であった地域の子ども社会は再生しました、と対外的には言いたいのですが、どうも私たちが経験した子ども社会とは違うのです」等、常に現状を盲目的に肯定せず、“何か違う”と、現場に目を向けながら考える姿勢は、我々にとっての重要な問題提起と言えるだろう。

次章「子ども社会づくりに再挑戦」で、ついに“主語”が変わる。大人がつくるのではなく、子どもがつくる子ども社会のかたちが、ここに見えてくる。コマという遊具を契機に、本来の意味で子ども社会ができあがっていくうねりが、躍動感を伴って語られるのである。その勢いは、太宰府天満宮での和ゴマ競技大会を生み出す。しかしながら、子ども社会ができたと思ったものの、遊びの中で大人に頼る状態から抜け出せず、ガキ大将不在という難題に直面するのである。

そこで、次章「ガキ大将を育てる」では、ここは敢えて大人が積極的に「ちびっこ指導員」という制度を設けることで、全体を引っ張っていく核ができたことが記されている。その土台の上で、ついに、

本来の意味での「子ども社会」へと繋がっていく。

次章「子ども社会が見えてきた」では、にぎわいを取り戻した広場の姿が描かれている。コマの団体戦やドラフト会議など、独特の文化も生まれ、それに刺激されるかたちでコマは益々上達し、遊びの輪も異年齢に広がっていったのである。ここで著者は、子ども社会の定義を示している。①多くの子が子どもたち自身の意思で集まっていること、②異年齢で構成されていること（小学校高学年から低学年・幼児）、③子どもたちの意思で遊んでいること（大人が関与しないこと）、④その集まりが継続していること、⑤その集団への出入りは自由であること、の５点である。

次章「素晴らしい子ども社会」では、子ども社会があることの成果が子どもや保護者のアンケートを元に整理されている。子どもたちはこの子ども社会の中で、自立心や社会性を身につけていく。また、統計的有意性までは確認できなかったものの、広場に参加していない子どもに比べて広場に参加している子どもの方が、自尊感情が高いという傾向が認められたことも特筆に値する。さらには地域の非行少年が減少するなど、具体的な成果も目に見えるようになってきた。

次章「アンビシャス広場から学んだこと」では、広場周辺の様々なトピックについて論じられている。例えばいじめに関して、広場がいじめ克服に役立ったケースや、いじめ問題を社会の責任で捉える必要性が言及されている。また、「過干渉の親が指示し、大人がセットした体験事業を受け、それをうまくこなす優秀な子がいて、それが見本である」というような、子どもへの過度な体験事業の問題性も興味深い。この広場で示してきたように、「子ども自身が自分の意思で行動し、自分たちで体験できる場を設けること」こそが、大切なアプローチなのである。

そして終章「自立心を育む『子ども社会』の再生」では、大人が書いたプログラムの中で子どもが遊ばされるのではなく、子ども自身が自分でプログラムを書き、自己発見をする訓練の場としての「子ども社会」の意味が確認される。

本書は、サブタイトルにあるように、「国分アンビシャス広場」というフィールドの発展のプロセスが丁寧に描かれている。ただし、本書が語りかけてくれることは、このフィールドに閉じない。

現在の子どもの遊び環境の厳しさ、子ども社会の喪失など子どもを取り巻く様々な問題に対し、一生懸命に実践を展開している大人は数多くいる。その時に、“大人が”一方的に「子どもを遊ばせる・体験させる・子ども社会をつくる」のではなく、本書が示してくれたように、“子ども自身が”子ども社会を創り上げられるよう支援することが、今の私たちに必要なことではないだろうか。

きっと「国分アンビシャス広場」をそっくりそのまま真似ればいいという話ではない。その地域に見合ったかたちで展開されることが望ましい。それでも本書には、どの実践の現場にも通ずる貴重なエッセンスが盛り込まれているという意味において、子どもの遊びに携わる大人に、必読の一冊と言えよう。ここから先の一歩は、我々読者に委ねられている。

［海鳥社、2013年、1,575円］

（西日本短期大学　山下智也）